

臨床倫理における 意思決定プロセスの研究

東京大学 大学院人文社会系研究科 特任教授
清水哲郎



研究の背景

哲学・倫理学は、従来は、先人が遺したことばを読み解き、先人との対話を通して、問題を根本的に考えるというスタイルでした。このやり方で、私は西欧中世の言語哲学をテーマとして、基盤研究(A)を数回得て、国際化を目指した研究を行ってきました。

加えて、現実の問題に向かい、そこで有効な知を探究してきました。医師、看護師たちとの対話を通して、現実の問題を《哲学する》という《医療現場に臨む哲学》の試みです。

やがて、哲学的思考は、医療従事者が患者・家族と向き合いながら働く際に起きる個別の「どうしたらよいか?」という問題を考える《臨床倫理》の営みにおいて、社会的にもっとも貢献し得ると考えて、取り組み始めました。その核心は、医療側と患者側が医療方針について共同の意思決定に至るプロセスを適切なものとすることにあります。

研究の成果

意志決定プロセスについて、現在流布している《説明と同意》という把握に対して、《情報共有から合意へ》というモデルを提唱しています(図1)。これは日本の文化における人間関係のあり方に相応しい倫理の理論と、実用に耐え得る実際的な方法を伴う成果です。

また、他者を《自分と同じ・一緒だ》と見て、助け合う行動

を特徴とする《同の倫理》と、他者を《自分とは異なる・別々だ》と見て、相互不干渉により平和共存を図る《異の倫理》とが、私たちの内に並存しているという発見をし、これを倫理的分析の核にする方法を確立しつつあります。

今後の展望

今年度から、新たに基盤研究(A)の研究が始まっています。これまでの成果をより明確にし、医療・介護のさまざまな現場ごとにより具体的な問題検討法を明確にし、患者本人・家族の意思決定プロセスを支援するやり方を開発し、併せて、この研究を次世代の研究者たちに引き継いでいこうとしています。

関連する科研費

平成11-13年度 基盤研究(B) 「医療現場における価値選択と共同行為に関するガイドラインと評価システムの開発」

平成14-15年度 萌芽研究 「臨床倫理学の哲学的基礎付けと医療現場における実用化」

平成23-26年度 基盤研究(A) 「ケア現場の意思決定プロセスを支援する臨床倫理検討システムの展開と有効性の検証」

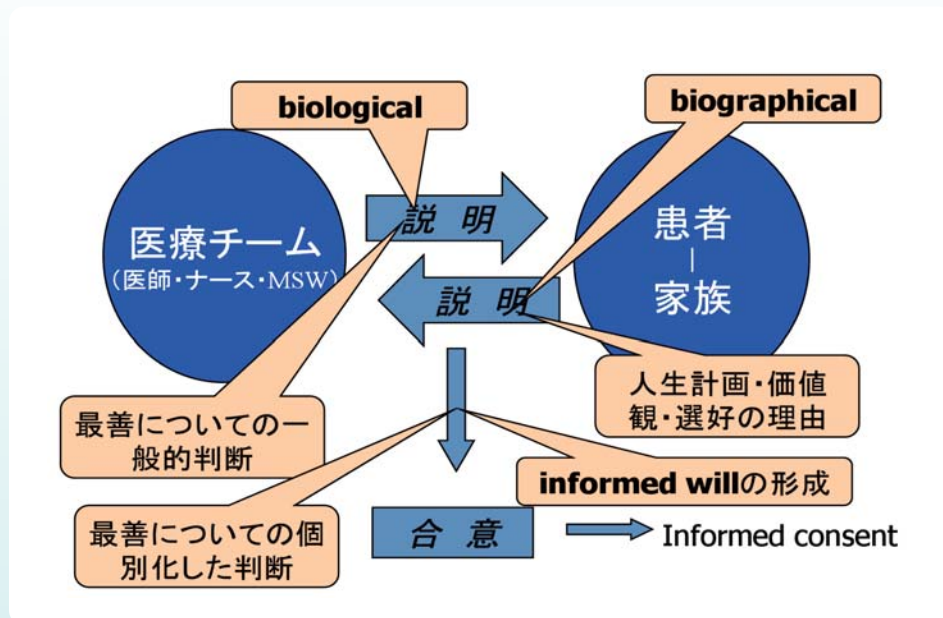


図1 情報共有-合意モデル
医療側からの情報は、患者の身体に関するbiological(生物学的)なものであるが、患者が語るの、自分の人生の物語り(biography)の中で罹患と治療について考えたことである。患者はその物語りを書き換えつつ、治療をこれに組み込むという仕方 informed will(状況理解を伴う意思)を形成する。そして治療に関する両者の合意に基づいて、患者は一定の治療について informed consent(状況理解を伴う許諾)を医療側に与える。